備える 3.11から

第38回 故郷を追われて

牙むいた「近所の原発」

塙さん一家座談会

「ご近所の原発」が大事故を起こした時、一家は何を思い、どう動いたか―。「備える 3・11から」の連載「いつの日か 原発1キロからの避難」に登場した塙（はなわ）さん家族が、前例のない原発震災にほんろうされた一年を振り返った。家族四人は「地域全体が安全神話に浸っていた」と自戒し、避難生活で感じた思いを訴えた。 （杉藤貴浩）

安全神話…危険考えず◆確実、迅速な情報欲しかった

―福島県大熊町の自宅は、東京電力福島第一原発から一キロほどの距離。震災が起こるまで、原発はどういう存在だった。

光 地元育ちにとっては、物心がついた時には原発があった。正直、それほど真剣に原発への賛否を考えたこともなかった。

幸 表だって反対の声を上げる人はほとんどいなかった。町には東電関係で働く人も大勢いたし、原発で地域が潤ってきたのも事実。原発の安全性をアピールする文書が、よく回覧板で回ってきたりしていた。

沙 そういえば小学生のころ、書道の習字で「原子力の火」って書かされたことがあったっけ。

―原発事故に備えた自治体や東電の訓練などは。

光 町中にある防災無線で「何号機が火災」と流れ、指定場所へ避難する訓練があったと思う。ただ、ほとんどが平日開催で、大半の人は仕事や学校で参加できなかった。

梨 えー、やってることも知らなかった。

幸 安全神話っていうのかな。存在に慣れすぎて、住民もあまり考えなくなっていた。

―震災当日に大きな揺れが来た後、原発で何かが起こる心配は。

全員 まったく考えなかった。

幸 自宅の手前まで津波が来たので、その恐怖ばかり。高台の避難所に家族が集まった後も、原発の異常を知らせる放送などは聞かなかった。

梨 私たちが最初に知ったのは、当日の夜につながった親戚との電話で「原発が危ない」と聞いたから。

幸 自治体は、原発に何らかの異常が起こって、少なくとも一晩では帰れそうにない点だけは早く教えてほしかった。パニックを恐れるのも分かるけど…。

光 着の身着のまま長い避難生活に入ってしまったからね。確実で迅速な情報の大切さが身に染みて分かった。原発が爆発したことも、後からカーナビのテレビで知ったくらいだから。

―震災二日後の十三日に福島県を出て親戚のいる愛知県に向かった。

光 それまで二日間、車のガソリンと食料を求めて福島県内を走り回った。あれからは、ガソリンが半分まで減ったら満タンにする習慣がついてしまった。

―愛知県豊田市の親戚の家に着いた後、三月下旬から被災者向けの県営住宅で暮らし始めた。

光 家賃が当面無償なのはありがたかった。身近な生活面での支援に感謝したのを思い出す。どうしても必要な家電を買いに行き、福島県から来たと知ると、店の人が大きくおまけしてくれた。

梨 自宅に置いたままだった大学の入学式用のスーツを買い直す時も値引きしてもらったな。

幸 お金だけの問題ではなく、ひと言「大変でしたね」と心を寄せてくれる言葉をもらえるだけで、ずいぶん救われた気になった。沙也加が転入した中学校も、先生方が「少しずつ慣れてくれればいいです」と言ってくれた。

沙 豊田の中学校の友達とは、今でも文通しているよ。

―逆に、言われて重荷になったりしたことは。

梨 「頑張れ」とか「泣かないで」「大丈夫！」というような言葉かな。

光 悪気がないのは分かるけど、「何をどう頑張るの？」という気分になることもあったな。

「頑張れ」…時に重荷◆復興とは永住の場 見つかること

―光一さんの仕事の都合もあり、五月末で豊田を離れ、福島県会津若松市へ移った。避難が長期化するにつれ、東電の補償問題が一家の関心事になった。

光 妻は大熊にあった職場を解雇になり、蓄えもどんどん減っていく。国の議論と東電の対応の遅さにはがっかりさせられた。

幸 九月に大熊町の自宅へ一時帰宅した時、あまりの線量の高さで帰郷をあきらめた。同じ感想を持った住民は多い。なのに国や町は効果の分からない除染に多額の費用をかけようとしている。もう少し、住民の意識の変化に敏感になってほしい。

光 帰郷を断念した住民は、新たなマイホームを建てるのに多額の資金が必要になる。国や東電が補償のあり方を議論している間にも、警戒区域外の住宅地は、移住を決断した人の購入で値上がりしていると聞く。

―一家にとって、復興の具体的な形とは。

光 何と言っても、安心して永住できる場所が見つかること。それまでは復興とは言えない。被災者にとって、震災一年は何の区切りにもならない。これを区切りに、福島や東北のことが忘れられるのが心配だ。

上一時帰宅した光一さんと幸さんが目にした自宅内。地震の揺れで先祖の遺影が落ちかかっている 下昨年9月の一時帰宅で、自宅周辺を歩く大熊町の人々＝いずれも塙さん提供

家族のプロフィル

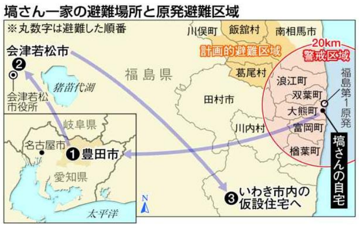
塙光一さん(44) 福島県浜通り地方で生まれ育つ。郵便局員。９年前、大熊町に自宅を新築。ローンが今も残る。

幸さん(44) 光一さんと同じく地元生まれの地元育ち。大熊町の農薬メーカーに勤めて家計を支えていた。

梨奈さん(19) スポーツ万能の長女。震災直後に東京の大学に進学。被災地との温度差に悩んだことも。

沙也加さん(15) 動物と読書が大好きな二女。高校受験を控えた1年に、引っ越しを繰り返した。

塙さん一家の避難場所と原発避難区域



塙さん一家のこの１年

【2011年３月11日】東日本大震災発生。福島県大熊町の塙さん宅から北へ１キロの福島第１原発にも津波が押し寄せる。夜、町内の高台にある避難所で家族４人の無事を確認

【同14日】福島県内を車で転々とした後、愛知県豊田市の親戚宅へ到着。自宅から持ってきたのは、毛布とポットと炊飯器だけ。下旬に市内の県営住宅へ入居。

【４月８日】幸さんが大熊町にある勤め先から解雇の連絡を受ける。

【５月末】豊田市を離れ、大熊町民が集団避難する会津若松市の温泉旅館へ。１カ月ほど暮らし、市内の仮設住宅へ入居。

【９月１日】光一さんと幸さんが大熊町の自宅へ一時帰宅。重い防護服と地震で荒れた室内に、「思い出の品を持ち帰るだけで２時間はあっという間だった」

【11月20日】大熊町長、町議選。町長には現職が再選。「震災前は人柄とかを見るだけだったけど、政治はやはり実行力」と光一さん。

【2012年２月】沙也加さんが高校受験に合格。「原発事故の影響で、新入生は１学級の十数人しかいないみたい」

【３月末】沙也加さんの入学に合わせ、いわき市の仮設住宅へ転居予定。

不動産の補償 急務

福島 県外避難６万2674人（２月時点）

大量の放射能漏れを起こした原発事故のため、今も多くの住民が福島県内外で避難生活を余儀なくされている。

内閣府によると、避難指示が出ている原発二十キロ圏内の警戒区域と比較的線量の高い飯舘村などの計画的避難区域に住んでいたのはおよそ八万七千人。塙さん一家が暮らしていた大熊町や隣の双葉町、富岡町は全域が警戒区域に含まれる。

福島県によると、このほかの地域からの自主避難者を含め、二月時点で六万二千六百七十四人が県外へ避難している。

東京電力は原発三十キロ圏内など六万三千八百世帯の住民を対象に、避難生活にかかわる費用や仕事の休業補償、精神的賠償などを金額の合意が成立した場合に支払っている。これまで65％にあたる四万一千五百世帯が賠償を受け取った。

東電の賠償案に納得できなければ、国などが設けた原子力損害賠償紛争解決センターに和解の仲介を申し立てられる。

国は十六日、放射線量が高く帰宅困難とみられる地域の住民に一人六百万円を一括で支払い、住宅は事故直前の時価を賠償するなどの指針を示した。避難住民の本格的な生活再建には、家や土地といった高額な不動産の補償が欠かせないだけに、東電の早急な支払い開始が求められる。

次回は４月２日掲載。津波予想高の電柱表示について考えます。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています